

# 英語における Truncated Clefts の談話情報構造

— Topic-Comment 構造と It-Clefts —

上野 貴史

## 1. はじめに

Leech (1983) では、談話<sup>1)</sup>におけるテキスト形成の原理として、処理可能性・明晰さ・経済性・表現性という4つの原理を提示し、このような原理が相関（競合）しながら談話を形成しているとしている。この原理の一つである経済性の原理には、統語論のレベルにおいても削減という原則が機能しているとされる。彼は、この削減の原則の過程の一つに、省略があるとしている。

本稿では、この経済性の原理と明晰さの原理が衝突する現象と考えられる It-clefts<sup>2)</sup> の truncated clefts<sup>3)</sup>に焦点を当て、考察を行うものである。truncated clefts は、(1) のように S-C<sub>i</sub><sup>4)</sup>の情報度が低い場合に、S-C<sub>i</sub> が脱落して生じるとされる<sup>5)</sup>。

(1) A: You mean, in other words, in the business of the staff-student relations, it's not the staff who are making a very poor business.

a. No no, it's the students by and large. (Hedberg (1990: 151))

(1)a. は 'who are making a very poor business' などを意味する内容の S-C<sub>i</sub> 部分が脱落していると考えられ、このような脱落現象は、語用論的な立場からしばしば考察の対象となっている。例えば、久野 (1978) は、談話における脱落現象は「言語的、或いは非言語的文脈から、復元可能 (recoverable)」(p.8) でなければならない、さらに、「フル・フォームが何であるかを、聞き手が先行文脈から推定できると、話し手が仮定した時のみ」(p.10) 可能であると述べている。そこで本稿では、It-clefts の脱落現象である truncated clefts の内部の情報構造に焦点を当て、脱落に関する談話語用論的条件を構築することを目的とする。このためにまず、語用論的立場からの It-clefts の先行研究を概観し、その後に、C<sub>i</sub><sup>6)</sup>と S-C<sub>i</sub> の情報構造の検証を行う。

## 2. 談話における It-clefts

It-clefts を談話の中の語用論的な角度から考察した研究において、多くのものが以下

の二つの構造を、It-clefts の異なるタイプの情報構造を持つ文として取り扱っている<sup>7)</sup>。

(2) A: Who broke that window?

B: *It was John who did it.*

(Declerck (1984: 254))

(3) ##<sup>8)</sup> *IT WAS MISS LEMON, Poirot's efficient secretary, who took the telephone call. Laying aside her shorthand notebook, she raised the receiver and said without emphasis, "Trafalgar 8137."*

(Christie, p.169)<sup>9)</sup>

Prince (1978) は、談話の中における WH-clefts<sup>10)</sup>と It-clefts との比較を通じて、It-clefts の S-C<sub>i</sub> の情報は 'given' ではなく、'known' <sup>11)</sup>であることを主張している。そして、It-clefts を談話上の機能から2種類に区別し、(2) を stressed-focus It-clefts、(3) を informative-presupposition It-clefts と呼んでいる。Declerck (1984) では、さらに (4) のような例を挙げている。

(4) But why is everybody so interested in uranium? - Because *it is uranium that you need to produce atomic power.*

(Declerck (1984: 263))

そして、Prince (1978) の informative-presupposition It-clefts を (4) のような unstressed-anaphoric-focus clefts と (3) のような discontinuous clefts に区別して考察を行っている。彼はまた、このような分類が specificational の copula の構文<sup>12)</sup>に全て適応されるということを主張している。しかし、これら二つの考察において、C<sub>i</sub> と S-C<sub>i</sub> の情報内容の定義は、余り明確にされていない。例えば、Prince (1978) の stressed-focused It-clefts と Declerck (1984) の contrastive clefts は、C<sub>i</sub> に 'new information' を持つとされている。しかしながら、このタイプに属する (5) において、It-clefts の C<sub>i</sub> である 'he' が 'new information' であるとは、筆者には理解しがたい<sup>13)</sup>。

(5) I asked her what was the matter with John and she answered that *it was he who had been the victim of the robbery.*

(Declerck (1984: 264))

次に、Hedberg (1990) は、談話語用論の topic-comment 情報構造<sup>14)</sup>から、It-clefts の分析を行っている。そして、(2) のように S-C<sub>i</sub> の部分が topic 情報を持つ It-clefts を topic-clause clefts、(3)・(4) のように S-C<sub>i</sub> の部分に comment 情報を持つものを comment-clause clefts として分類している。また、Collins (1991) では、大きく It-clefts を3つのタイプに分類し、さらにそれぞれの情報の差異から下位分類を行い、合計12の It-clefts のタイプを認めている。

ここで、(2) のような It-clefts を Type A、(3) を Type B、(4) を Type C とすると、完全に対応するわけではないが、これらの考察におけるそれぞれの It-clefts の名

称と分類は、次のようにまとめられる。

	Prince(1978)	Declerck(1984)	Hedberg(1990)	Collins(1991)
Type A	stressed-focus	contrastive	topic-clause	Type 1
Type B	informative-presupposed	discontinuous	comment-clause	Type 3
Type C		unstressed-anaphoric-focus		Type 2

さて、このように分類される It-clefts の中で、truncated clefts として出現するクラスは、Type A である<sup>15)</sup>。この Type A の C<sub>i</sub> と S-C<sub>i</sub> の部分に topic-comment の情報構造をあてはめると (6) のようになると考えられる<sup>16)</sup>。

(6) Type A: It is/was [comment] which/who(m)/that/φ [topic]

(6) の comment の談話語用論的な特性について、Hedberg (1990) では、‘contrast’ を提示している。また、大きく分けて ‘direct activation’ と ‘indirect activation’ の特性を持つとされる topic に関して、truncated clefts は、‘direct activation’ だけではなく、「注意の中心」である ‘in focus’ の特性を持つとしている<sup>17)</sup>。つまり、truncated clefts の情報構造は (7) のようになると考えられる。

(7) truncated clefts: It is/was [comment] which/who(m)/that/φ [topic]

comment : contrast

topic : in focus

そこで、本稿では、(7) のような談話語用論的特徴を再検討し、さらに脱落可能な談話と不可能な談話を比較しながら、脱落に起こる情報特性の考察を進めていく。

### 3. C<sub>i</sub> における情報構造

ここでは、Type A の C<sub>i</sub> がどのような談話的特徴を持っているかを考察する。まず、Type A に属すると考えられる以下の談話を考えてみる。

(8a) So I learned to sew books. They're really good books. *It's just the covers that are rotten.* (Prince (1978: 896))

(8b) The body of Hugo Ullstone - the real Hugo - was found lying in the shrubbery next morning. *It was I who found him.* After a restless night... (Hedberg (1990: 158))

(9a) A: Who called?

B: *It was John.*

(9b) Oh, every muscles aches in my body. *It's my legs and feet, ankles and so forth.* (Hedberg (1990: 152))

(10a) A: Oh, I've read that.

a. It's lovely, isn't it?

b. Must have been yours that I read, I think, unless *it was John's*.

(Hedberg (1990: 151))

(10b) ...My heart beat fast, for I had thought that as the discoverer of the body I would be the first to be called: but to my surprise, *it was Marcel*. He stepped forward, neat, dark, debonair...

(Hedberg (1990: 152))

(8) は non-truncated、(9)・(10) は truncated のそれぞれ Type A に属する It-clefts である。これらの  $C_1$  の部分に現れている要素は、すべて強く発音され、comment の情報を示すが、その情報の種類はそれぞれ異なっていると思われる。まず、(8) の  $C_1$  は (9)・(10) とは異なり、言語的に先行文脈から明確な contrast ( $C_1$  と対応するもの) が示されていない。本稿では、このような情報特性を持つものを contrast 1 と呼ぶ。次に、(9) と (10) の  $C_1$  は共に先行文脈の情報の一部と言語的に比較・対照・特定されている。つまり、(9) では先行文脈の comment (a における 'who' <sup>10)</sup>、b における 'my body' ) について、It-clefts の  $C_1$  で特定・具体化 (a における 'John'、b における 'my legs, feet, ankles and so forth' ) を行っている。このような  $C_1$  を contrast 2 とする。一方、(10) では先行文脈の comment (a における 'yours'、b における 'I' ) について、It-clefts の  $C_1$  は対照・比較 (a における 'John's'、b における 'Marcel' ) を提示している。これを contrast 3 とする。このようなものから (11) のような仮説が成り立つ。

(11)  $C_1$  の情報特性が contrast 2・contrast 3 であり、It-clefts の中で comment の情報を示す場合に、truncated-clefts が生じる。

また、このような contrast 2・contrast 3 に対応 (特定・対照など) している言語的な先行文脈の部分は、その文の comment になっている。例えば、(9a) と (10a) における情報構造を記述すると、以下のようになると考えられる。

(9a') A: Who called?

Com. Top. <sup>10)</sup>

B: *It was John*.

Com.

(10a') A: Oh, I've read that.

a. It's lovely, isn't it?

b. Must have been yours that I read, I think, unless *it was John's*.

Com. Top.

Com.

従って、(11) の仮説は (12) のように修正される。

- (12)  $C_1$  の情報特性が contrast 2・contrast 3 であり、It-clefts の中で comment の情報を示す場合に、truncated clefts が生じる。また、これらの contrast 2・contrast 3 に対応する先行文脈における要素は、その先行文脈の comment 情報を示す。

#### 4. S- $C_1$ における情報構造

Prince (1978) では、脱落している S- $C_1$  をプラグ学派の communicative dynamism<sup>20)</sup> の概念を用いて、「communicative dynamism が低い場合に脱落が起こる」と説明している。しかしながら、2. でも述べたように、この communicative dynamism の低いとされる S- $C_1$  が、WH-clefts の S- $C_1$  の 'given' とは異なる 'known' の情報を示すとも Prince (1978) では説明されている。この S- $C_1$  が 'known' の情報であることと、communicative dynamism が低いということは矛盾する主張である。従って、ここでも 3. と同様に、It-clefts の S- $C_1$  が Givenness Hierarchy における in focus である時に、脱落が起こるという Hedberg (1990) の主張を基にして考察を行うことにする。そこでまず、(13) の仮説を立てる。

- (13) It-clefts の S- $C_1$  の情報が in focus である場合に S- $C_1$  は脱落する。  
この仮説に対して、次の例で検証を行う。

- (14) Wait a minute. Mike Dukakis did not mention the name 'George Bush' once.  
*It's the others who are doing it.* (Hedberg (1990: 149))

この (14) の It-clefts の S- $C_1$  は、Hedberg (1990) が主張する in focus であると思われる。そこで、この S- $C_1$  を脱落させたものが (15) である。

- (15) Wait a minute. Mike Dukakis did not mention the name 'George Bush' once.  
*It's the others.*

この談話における truncated clefts は、(16a) と (16b) のような二つの意味の解釈が可能であると思われる。

- (16a) ... It's the others whom he (Mike Dukakis) had mentioned.

- (16b) ... It's the others who mentioned him (George Bush).

もちろん、これはテレビ討論という会話における談話であるので、先行する文脈のストレスの位置によりこの曖昧さは解消されると考えられる。つまり、この談話での truncated clefts が適格である条件は、先行文脈にストレスを置き comment の位置を明確にすることである。例えば、(16a) は (15) の 'George Bush' にストレスを置いて発話した場合、つまり It-clefts の先行する文における 'George Bush' という要素を comment とした場合の解釈であり、(16b) は 'Mike Dukakis' にストレスを置いて発話した場合、つまり 'Mike Dukakis' が先行文脈の comment である場合の解釈になる。従って、先行

文脈の topic と comment が明確でないと、(14) は、脱落が不可能（不適格）になるということが言える。このことから、(13) の仮説を (17) のように修正する。

- (17) S-C<sub>1</sub> の情報特性が in focus であり、It-clefts の中で topic の情報を示す場合に、truncated clefts が生じる。また、in focus の特性を持つ S-C<sub>1</sub> に対応する先行文脈の要素は、その先行文脈における topic の情報を示す。

このことを例証するために、(18) の文を考えてみる。

- (18) Nobody knows who killed the old man. The police seem to believe that it was a tramp who did it. (Declerck (1984: 264))

(18) に情報の流れを加えてみる。

- (18') Nobody knows who killed the old man. The police seem to believe that it Com. Top.  
was a tramp who did it.

Com. Top.

この (18) の It-clefts の S-C<sub>1</sub> である 'who did it' は、(12)・(17) の条件を満たしており、実際に脱落可能である。

## 5. 結語

ここで仮説 (17) の例証として、3. で取り扱った (9a) と (10a) の情報構造を完成させておく。

- (9a'')A: Who called?

Com. Top.

- B: It was John (who called).

Com. Top.

- (10a'')b. Must have been yours that I read, I think, unless it was John's (that

Com. Top.

Com. Top.

I read).

上記のものや本論の中で考察してきたものから、It-clefts の truncated clefts の生起条件として、次のことが指摘できる。

- 条件1: C<sub>1</sub> の情報特性が contrast 2・contrast 3 であり、It-clefts の中で comment の情報を示す場合に、truncated clefts が生じる。また、これらの contrast 2・contrast 3 に対応する先行文脈における要素は、その先行文脈の comment 情報を示す。

- 条件2: S-C<sub>1</sub> の情報特性が in focus であり、It-clefts の中で topic の情報を示す場合に、truncated clefts が生じる。また、in focus に対応する先行文脈

における要素は、その先行文脈における topic の情報を示す。

条件3: truncated clefts は、条件1と条件2が同時に生起する It-clefts に起こる。

最後に、このような条件が備わっている場合の脱落の容認性について、若干触れておく。(9a'')・(10a'')の括弧で明示した情報は、脱落している部分を書き加えたものであるが、このような文はかなりの情報過多を示す。一般的に、このような談話においては、S-C<sub>1</sub>の情報は脱落させる方が適格な談話になると思われる。これは、冒頭に示したように Leech (1983)の経済性の原理が強く働いている例であると考えられる。また、本論(15)で示した二重の解釈が可能な談話は、明晰性の原理が不十分なため経済性の原理が機能できないような例であると言える。このようなことから、談話上、「先述の条件を満たす」・「不明瞭にならない」・「情報過多である」場合に truncated clefts が出現すると考えられる。

#### 註

- \* 本稿は、平成4年度大阪女子短期大学研究助成金による研究成果の一部である。
- (1) Leech (1983)では、この原理を談話 (discourse)ではなく、テキスト (text)に関係するものとして規定している。しかし、本稿では、談話を「いくつかの文が連なったもので、全体として1つまとまった内容を持っており、そのまとまりのための言語的文脈や非言語的文脈などを広く含む総体」として定義し、厳密にテキストと談話の区別を行わない。
  - (2) It-clefts は単純に Clefts とも呼ばれるが、本稿では Prince (1978)に倣い、It is/was C<sub>1</sub> which/who(m)/that/φ S-C<sub>1</sub> (‘S-C<sub>1</sub>’は文から C<sub>1</sub>の構成要素を除いたものを示す)の構造を持つものを It-clefts と定義する。
  - (3) Hedberg (1990)で示された S-C<sub>1</sub>が脱落している It-clefts を指す。
  - (4) 註(2)で示した S-C<sub>1</sub>の部分は、that-clause (Prince (1978))、WH-clause (Declerck (1984))、cleft-clause (Hedberg (1990))、relative clause (Collins (1991))などのように様々な用語で呼ばれているが、本稿では S-C<sub>1</sub>と呼ぶ。
  - (5) 本論4.を参照。
  - (6) C<sub>1</sub>の部分は、focus (Prince (1978), Declerck (1984))、clefted constituent (Hedberg (1991))、highlighted element (Collins (1991))など様々な用語で呼ばれているが、本稿では C<sub>1</sub>と呼ぶ。
  - (7) Erades (1962)では、(2)のような文は It-clefts ではなく異なるタイプの文と

して分類している。

- (8) ## は談話の冒頭を示す。
- (9) この談話は, Christie, Agatha. 1982. *Agatha Christie's Detectives*. Avenel. の中の *Dead Man's Folly* という小説の冒頭である。
- (10) 本稿では What S-C<sub>1</sub> is/was C<sub>1</sub> の構造で現れる分裂文を WH-clefts と呼ぶ。
- (11) Prince (1978: 903) では、それぞれ次のように定義している。
- “GIVEN INFORMATION: Information which the coöperative speaker may assume is appropriately in the hearer's consciousness.”
- “KNOWN INFORMATION: Information which the speaker represents as being factual and as already known to certain persons (often not including the hearer).”
- (12) Declerck (1984: 252) では、specificational を次のように定義している。
- “the NP that is subject of *be* in underlying structure represents a variable for which the predicate nominal specifies a value”
- (13) Declerck (1984: 265) では、“in the sense that the NP has not yet been specified as value for the variable in the preceding context” という意味で ‘new information’ であるという限定が付いているが、このような限定を持つ情報が ‘new information’ であるという考察に対して、筆者は妥当性を欠いていると考えている。
- (14) Gundel (1988: 210) による次の定義を参照。
- “Topic Definition: An entity, E, is the topic of a sentence, S, iff in using S the speaker intends to increase the addressee's knowledge about, request information about, or otherwise get the addressee to act with respect to E.”
- “Comment Definition: A predication, P, is the comment of a sentence, S, iff, in using S the speaker intends P to be assessed relative to the topic of S.”
- (15) Prince (1978)、Hedberg (1990)、Collins (1991) を参照。
- (16) Hedberg (1990) 参照。
- (17) Hedberg (1990) では、次の Givenness Hierarchy (Gundel et al. (1993: 275)) を文や句のレベルに適応して考察している。
- ‘The Givenness Hierarchy’
- |  |          |      |
|--|----------|------|
| in   | uniquely | type |
| focus > activated > familiar > identifiable > referential > identifiable |          |      |
- (18) このように contrast 2 は疑問代名詞 *who* で代表される。



- (19) Com. は comment を、Top. は topic の情報を意味する。  
(20) Firbas (1964) 参照。

#### 参考文献

- Collins, Peter C. 1991. *Cleft and Pseudo-cleft Constructions in English*. Routledge.
- Declerck, Renaat. 1984. *The Pragmatics of It-clefts and WH-clefts*. *Lingua* 64. pp. 251-289.
- Erades, P. A. 1962. *Points of Modern English Syntax XLIII*. *English Studies* 43. pp. 136-141.
- Firbas, Jan. 1964. *On Defining the Theme in Functional Sentence Analysis*. *Travaux Linguistiques de Prague* 1. pp. 267-280.
- Geluykens, Ronald. 1992. *From Discourse Process to Grammatical Construction*. John Benjamins Publishing Company.
- Gundel, Jeanette K. 1988. *Universals of Topic-comment Structure*. In M. Hammond, E. A. Moravcsik and J. R. Wirth (eds.) *Studies in Syntactic Typology*. John Benjamins Publishing Company. pp. 209-239.
- Gundel, Jeanette K., Hedberg, Nancy A. and Ron Zacharski. 1993. *Cognitive Status and the Form of Referring Expressions in Discourse*. *Language* 69: 2. pp. 274-307.
- Hedberg, Nancy Ann. 1990. *Discourse Pragmatics and Cleft Sentences in English*. University Microfilms International.
- Kuno, Susumu. 1987. *Functional Syntax*. The University of Chicago Press.
- Leech, Geoffrey. 1983. *Principles of Pragmatics*. Longman.
- Prince, Ellen F. 1978. *A Comparison of WH-clefts and It-clefts in Discourse*. *Language* 54: 4. pp. 883-906.
- Ueno, Takafumi. 1991. *A Text Linguistic Study of English Demonstrative Adjectives*. 大阪女子短期大学紀要第16号. pp. 121-128.
- 神尾 昭雄. 1990. 『情報のなわ張り理論』. 大修館書店.
- 久野 暁. 1978. 『談話の文法』. 大修館書店.
- 福地 肇. 1985. 『談話の構造』. 大修館書店.